

日本胆道学会の過去と現在  
そして未来への展望

日本消化器病学会理事長

下瀬川 徹

日本胆道学会設立50周年、誠におめでとうございます。日本消化器病学会を代表して心よりお祝いを申し上げます。

日本胆道学会は1965年11月に設立された「胆のう造影研究会」に始まったと記録されています。私の専門領域である日本膵臓学会の歴史は1969年の日本膵臓病研究会設立に始まりますので、4年後輩になります。日本膵臓病研究会の創設は、1963年の第5回日本消化器病学会秋季大会に集った血気盛んな若い膵臓研究者の熱く活発な活動によると聞いております。1960年代、日本の膵臓病研究は黎明期にあり、欧米に追いつき、追い越すべく消化器病学会から専門領域として萌芽していったエネルギーの高揚を感じ取ることができます。日本胆道学会も、同じような背景によって日本消化器病学会から新生していったのではないかと想像します。

「胆のう造影研究会」は、その後、第5回研究会から「胆道疾患研究会」に、第18回研究会から「日本胆道疾患研究会」に改称され、1987年8月の第22回日本胆道疾患研究会において日本胆道学会への移行が了承されました。その後も順調に発展し、現在は会員数約2,300名の世界でも有数の胆道領域の研究組織に成長しております。特に、2008年9月に学会理事長に就任されました故近藤哲教授のもと、学会に大きな改革が加えられ、2011年には胆道学会認定「指導医」制度を導入し、2010年からは肝胆膵外科学会のJHBPSを学会英文誌にするなど、将来の目標をしっかりと見据えた活発な活動を展開されました。その精神は乾和郎現理事長に継承され、着実に実行されています。

日本胆道学会が学会活動の方向性として掲げる5つの柱、多様な領域のプロが意見を出し合い学会の専門性を高める自由な環境、若い世代に魅力のある学会、胆道専門医としての社会貢献、国際交流および高い臨床・研究成果の発信による国際貢献、学会主導の研究展開は、まさに消化器病学会が今後展開していこうとする目標と重なります。

日本消化器病学会は昨年、創立100周年を迎えました。東京国際フォーラムで開催された4月の第100回総会では、記念式典が盛大に執り行われました。日本胆道学会は奇しくも日本消化器病学会の100周年と同じ年に50周年を迎えたわけです。共に先人の築かれた歴史を振り返り、初心に立ち返って、一層の連携のもとに新たな歴史を造っていかうではありませんか。



日本消化器外科学会理事長

森 正樹

日本胆道学会が50周年を迎えるに際し、日本消化器外科学会の理事長としてお祝いを申し上げます。

まずは半世紀にわたり日本の胆道学の発展に大きく寄与されてこられた指導者の皆様、会員の皆様に心から敬意を表します。患者さんにとっても医療者にとっても、大変に難しい領域であり、会員の皆様の診断学と治療学の発展に対する熱い思いにより、今日の世界のトップリーダーとしての地位が築かれたものと拝察しています。

さて、私どもの日本消化器外科学会は会員数が約21000人ですが、会員の専門は上部消化管外科、下部消化管外科、あるいは肝胆膵外科などに分けられます。胆道学を専門とする外科医の多くは肝臓外科、膵臓外科にも深く関わっています。

昨今、新たな専門医制度が発足しつつありますが、消化器外科学会は基本領域である外科学会の2階建て部分として取り扱われています。他方、食道外科専門医や肝胆膵外科高度技能医は消化器外科学会のさらに上に乗っかる形であり、3階建て部分に相当すると位置づけられています。その点で食道学会、肝胆膵外科学会と私どもの消化器外科学会は連絡を密に取り合っています。しかし、胆道学会は内科系と外科系が共同で運営する横断的学会ですので、上記両学会と比べるとこれまでは関係が薄かったように思います。ただ、2013年7月及び2014年1月の消化器関連学会意見交換会にて、専門医制度に関して一緒に討議する機会に恵まれました。また、今後はがん登録等を通じて、内科系の意見も取り入れながらnational clinical database (NCD) を活用した臨床研究といった将来展望もあろうかと存じます。日本胆道学会は現状では消化器外科データベース関連学会協議会（日本食道学会、日本胃癌学会、大腸癌研究会、日本肝胆膵外科学会、日本肝癌研究会、日本膵臓学会、日本内視鏡外科学会、日本腹部救急医学会、日本消化器外科学会）のメンバーではありませんが、将来的には、専門医制度、がん登録、臨床研究といった点で関係構築が切に望まれます。

これは個人的な見解ですが、胆道外科を志す外科医は昔とは氣質が異なっているように思います。少し前までは外科手術手技オンリーの意見の持ち主が多かったように思いますが、最近では集学的治療の一つとしての外科治療を考える方が多くなってきたように思います。

診断・治療の難しい領域だけに会員の皆様への国民の期待はますます大きくなると思います。会員一人一人のご発展が日本胆道学会の発展に直結すると思いますので、ますますのご発展をお祈り申し上げます。

## 祝 辞

# 継続の礎のうえに更なる飛躍を —日本胆道学会とともに—



日本消化器内視鏡学会理事長

田尻 久雄

日本胆道学会設立50周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。現理事長の乾和郎先生はじめ役員、会員の先生方、そして同学会の発展のために精魂を傾けてこられた歴代の役員の方々に深甚なる祝意を表します。

日本胆道学会は、昭和40年（1965年）11月に設立された「胆のう造影研究会」に始まり、昭和44年（1969年）に「胆道疾患研究会」と改名され、昭和61年（1986年）に日本胆道学会が設立されています。胆道疾患研究会および日本胆道学会の設立に貢献された亀田治男先生は、東京慈恵会医科大学第1内科元教授で、胆石症の研究の第一人者として、110,301名の胆石症患者を集計されたことは有名です。現在も東京慈恵会医科大学高木会館の一室に当時、収集された胆石の標本が陳列されています。昭和57年1月から平成3年10月末日まで東京慈恵会医科大学第1内科に胆道疾患研究会の事務局が置かれていたことも日本消化器内視鏡学会理事長を務めている私と日本胆道学会との由縁を覚えます。

一方、日本消化器内視鏡学会は、平成20年（2008年）に創立50周年を迎えています。母体となった「胃カメラ研究会」が昭和30年（1955年）1月に開催され、昭和34年（1959年）6月に「胃カメラ学会」となり、昭和48年（1973年）に「日本消化器内視鏡学会」に改名されています。このように二つの学会は同じ時代に様々な苦節を乗り越えてきており、歴代役員の方々の多くは両学会の発展に関わってきています。この50年を振り返ると、多くの先達が消化器内視鏡あるいは胆道疾患の分野における課題は何かを見極め、どのような診断と治療が医療界のため、国民一人一人のために貢献できるのか常に考え続けてきたことが今日の隆盛につながったのだと考えています。日本消化器内視鏡学会が飛躍的に発展してきたのは、精緻な診断理論の確立とともに治療内視鏡の開発と普及に拠るところが大きく、現在、広く普及している早期消化管癌に対するESDの嚆矢となったポリペクトミーの開発（1968年）と総胆管結石の治療や胆道ドレナージを可能にしたパピロトミーの開発（1973年）は特筆すべきです。とくに後者の開発から普及・発展は、日本胆道学会にも大きなインパクトを与えたものと思われます。

日本胆道学会が設立されて過去50年を振り返り、次なる50年をどのように構築していくべきかについて、現在の役員と次世代を担う若い会員諸先生方の英知を結集することが重要です。さらに関連の深い学会（日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会、日本肝臓学会、日本消化器外科学会、日本肝胆膵外科学会など）とも協調しながらも独自性のある活動を追求して、更なる飛躍を目指すことを期待しています。

## 日本胆道学会のこれまでの歩みと将来への期待



日本肝胆膵外科学会理事長  
千葉大学大学院臓器制御外科学教授

宮崎 勝

日本胆道学会の前身は、1965年の第一回胆嚢造影研究会に始まる。その第一回の研究会は千葉大学第一外科（現在の臓器制御外科学教室）の窪田博吉先生を会長として始まった。当時千葉で開催されたこの研究会には5題の演題が発表されている。翌1966年には胆道疾患研究会と名を変えて、東京にて高山欽哉先生の会長で開催され、17題の演題となっている。そして、1987年第23回より現在の日本胆道学会となり、弘前の小野慶二教授の会長のもと開催されて現在に至っているわけです。私自身も第49回の本学会の会長に立候補させていただいたのは、この学会の創始時代に我々の教室が深く関わっていたことを知り、その中心人物である窪田博吉先生が私の大学卒業後に入局した際の千葉大学第一外科教室にて講師でおられ、よくご指導いただいた縁よりでした。

私が医学部卒業後の入局当時に窪田先生が率いる研究室（第7研究室）のメンバーの方々は様々な学会の準備の中でも、特にこの胆道疾患研究会（現胆道学会）に力を入れていたことをよく記憶しています。私は、当時一度も参加したことはありませんでしたが先輩方の姿勢を見てそれほどこの研究会で熱い議論がされているのだろうことを想像し、感じた次第です。私自身が積極的に本学会に参加したのは、その後肝胆膵外科学を専門として仕事を始めた本研究会が学会へ移行した頃だったかと思います。評議員となり、有山理事長の時代に編集委員に選んでいただき、本学会について多くを学ばせていただいたとともに有山理事長という鋭い学問に対する先見性、カリスマ性を持たれた素晴らしい先生にご指導いただけたことは、私にとってはありがたい経験でありました。その後、二村雄次理事長、近藤哲理事長、そして現在の乾理事長と素晴らしい胆道医に本学会が順調に牽引され、発展を遂げてきました。その間、私自身も理事の一人として本学会運営と一緒に携わって参りました。一時は会員数も減少傾向の時代もあって、会員確保に様々な手立てを工夫してきたこともありましたが、その努力あってか徐々に会員数が増加し、学術集も演題数が増加して活発な学会に生まれ変わって参りました。

私が現在、理事長をしている日本肝胆膵外科学会とは、これまで様々な所で連携協力をし合ってきています。肝胆膵外科学会で担っている日本胆道がん取り扱い規約の第6版改訂また胆道癌診療ガイドラインの第2版の改訂において、日本胆道学会の会員の方々特に内科系病理系放射線系の医師にご協力をお願いして参りました。これらの事業のほかには、胆道学会の学会誌である雑誌胆道に掲載された原著論文の中から、優秀論文に対して日本肝胆膵外科学会の機関誌であるJournal of Hepatobiliarypancreatic Sciencesへの投稿を推薦して掲載していることは、本学会と日本肝胆膵外科学会とで若い胆道医を共に積極的に育成していこうという姿勢の表れであります。これからも日本胆道学会の若い会員にとって、英語論文への足掛かりとして、Journal of Hepatobiliarypancreatic Sciencesをぜひ利用していただきたいと思います。両学会会員達はその各々の学問的姿勢を尊敬しあって、かつ各々の意見を率直に言い合えるような環境を維持していくことが、学術団体として、その価値を保持するうえで最も重要なことと考えています。今後も両学会がそのような共通の高い学会理念のもと連携し協力し合って、更なる発展をしていって欲しいものと願っています。